

日中交流二十年——武術人生を歩んで

張 成忠

なぜ武術を学んだか

私は山東省との省境に近い江蘇省の豊県に生まれた。雨の少ないところで稲が育たず、コーリャンやサツマイモを食べて育った。生活は苦しく、子供の頃は軽い栄養失調だった。少年時代は文革の真っ最中で授業がほとんどなく暇を持って余っていたので、武術を練習するにはちょうどよかった。私は六歳で父母の意向により武術人生を歩み始めた。当時の動乱に加え、郷里には古い考え方やしきたりがあったため、弱い者いじめされないように、というのが両親の意図だった。

当時、人々は文革のもたらした恐ろしい災難に喘いでいたが、七

〇年代文革末期に入ると、それまで否定されていたものが見直されるようになり、知識人たちは自己批判を始めた。中国は復興を急がねばならなかった。同時に外国と接触を持ち、世界中の人々に中国を理解してもらうことも必要だった。では、世界に自分たちの国を紹介し、且つ対等な立場で交流するにはどうしたらよいか。そこで打ち出されたのがスポーツ競技だった。スポーツは結果が公正にあらわれるからだ。

早速、政府はこれを窓口に、国家の宣伝を図ることにした。だが、もし一流の選手達が目的を果たせなかったらどうするのか？ そこで、全国の何億という人民の中から優れた人材を発掘し、育てるこ

とになった。

こうして私は都会から来た教官の目にとまり、辺鄙な村から大都市南京へと連れてこられた。驚いたことに、江蘇省各地から選ばれてきた子供の数は実に多かった。何百という子供達が南京に集まっていた。競争はまさにここから始まった。長期間観察され、ふるいにかければ、最後に残ったのはたったの九人だった。幸運にも私はその中にいた。だが、私を残すかどうかについては、決してそんなりと決まったわけではなかった。後から知ったのだが、議論が

分かれ、ずいぶんともめたらしい。結局、会議で残留賛成がわずかに多かったため、残ることができた。こうして九人の子供達は引き続き観察されることになった。もしも、体形、容貌、健康から心理的なものまで、スポーツ選手に要求されるもののうち、一つでも欠けていると判断されれば、すぐに送

り返される可能性があった。私はどんなことがあっても家には帰りたくなかった。理由は簡単だ。南京では毎日白米を食べ、しかも毎食ごとに肉が出た。貧しい農村出の、年に数回しか肉を口にしたことのない子供にとって、これはすばらしい魅力だった。帰りたくないのは当然だ。

南京に残る唯一の方法は、死ぬもの狂いで練習することだった。あの頃、私の頭の中にはそのことしかなかった。プロの選手になるのは容易ではない。選ばれるのは千に一人、万に一人だ。だが、一度選ばれてしまえば、十一歳の子供でもプロ選手なのだ。生活水準は普通の人のそれを優に超え、私達のような鼻たれ小僧が忽ち国家に保護される人材となるのだから、まったく信じられないような話である。こういうことは、今の時代では理解できないかもしれない。しかし事実なのだ。

もちろん訓練は死ぬほど辛かった。今だに思い出すのもいやなくらいだ。毎日五、六時間しごきまわされた。体はポロポロになり、歩くのさえもやつとだった。笑うと体中が痛んだ。こんな苦痛に子供が耐えられるはずもない。練習中は泣き声が絶えず、逃げ出す者は後を断たなかった。だがこの訓練は私の意志をきたえた。あの苦しみがなければ今の私はないといってもよいだろう。南京での経験は、私の大きな財産となった。

日本の中国武術愛好者と中国の選手とでは、本質的な違いがある。日本の愛好者は単に趣味としているにすぎないが、中国の選手は試合に参加し、競うことを目的としているからだ。そのため中国選手の訓練方法をそのまま日本の愛好者に適用することはできない。だから、もし読者の皆さんが私の経験から何かを得ることができ、元気づけられるようなことがあると

すれば、それで十分である。
日本との交流

二十年前、私は中国武術ナショナルチームの一員として日本を訪れた。初めての訪日で、日本人の礼儀正しさが、行き届いたもてなし、清潔な街、進んだ経済に深い印象を受けた。当時、太極拳は今ほど広まっていなかったように思う。聞くところによると、ウーロン茶のコマーシャルで太極拳が知られるようになり、学習人口が増えたいらしい。

当時の中国武術代表団のメンバーは、武術界に名だたる大先輩（多くはすでに世を去ったが）や、有名選手、全国チャンピオンなど、一流の顔ぶれだった。中国がいかに日本を重視していたかが見てとれる。これに対し、日本側のもてなしもまた至れり尽くせりで、世界各国を歴訪した私でさえも感激したほどだった。会場はいつも超

満員で、一つ演じるたびに観衆は嵐のような拍手で答えてくれた。

一九八四年江蘇省武術講師団と

共に再び来日した。愛知県と江蘇省、名古屋と南京は姉妹都市だったので、日中友好の使者として私は二人の講師と共に名古屋に招かれ、三か月間指導することになった。名古屋に着くと、間もなく我々は大阪で開かれた第一回全日本中国武術太極拳大会に赴き、そこで私は審判を務め、さらに閉会式で特別演武を行なった。観客のほとんどはそれまで本物の中国武術を見たことがなく、私は特に中国で優勝した種目を演武したので、会場から驚嘆の声が上がった。観客は中国武術のすばらしさに圧倒された様子だった。

それからというもの、中国武術を学びたいという人達が続々と訪れ、我々三人はみるみる忙しくなった。当時は講師がひどく不足していたため、名古屋だけでなく、

三重や静岡まで出かけて行った。今やあの頃の教え子達が日本の指導者となっている。

一九八七年の終わり、私は現役を引退し、縁あって再び日本の地を踏んだ。教え子達の中には、その頃からずっと学んできた者もあり、十年以上もの間、勤勉忠実にゆめめ努力を続けている。ゼロから出発したにもかかわらず、簡単な太極拳から複雑な伝統太極拳まで身につけた。「内家拳」「外家拳」という二つの流派をマスターしたり、「套路」(型)だけでなく、「散手」(格闘技)までこなす者も出てきた。教え子の中で、これまで六人が全国大会で優勝した。そのうち一人は五年連続優勝し、国際試合で二位を獲得した者もある。

二十年前に比べれば、中国武術はかなり普及したが、地方ではまだまだ講師が不足しており、優秀な指導者がいない。そのため、私

は他府県へ招かれて指導したり、時には講演に出かけたりすることもある。ほとんど休日返上だが、指導を待っている人たちがいる限り、誰かが中国武術を広めねばならないのだと思うと、疲れたのだと言っではいられない。

中国武術が大学の選択科目に

一九八九年、私は愛知大学名古屋校舎にて中国武術を指導する機会に恵まれた。日本の大学で中国武術を体育の選択科目に取り入れたのは、愛知大学が初めてだった。今でこそ中央大学をはじめ、東京の一部の大学では太極拳の授業を行なっているが、「長拳」「南拳」、武器法の「棍」、格闘技の「散手」「擒拿」(関節技)まで取り入れているのはやはり愛知大学だけである。

最初の頃は、いろいろと思わぬ困難にぶつかった。まず、学生が中国武術を全く知らないこと、次

に日本語で授業をするのに非常に骨が折れたこと、また、体育を軽視する学生がいたため、授業がともやりにくかったことだ。

中国武術は他の体育選択科目同様、学校から認定されていたが、はじめ私の授業を選択した学生はごくわずかだった。彼らは中国武術を見たこともなかったからだ。

そこで植屋春見教授の提案により、科目を選択する前に学生達に私の経歴を紹介し、中国武術を演じてみせることになった。この方法はうまくいった。「努力は人を欺かず」で、数年もすると、徐々に学生が増え始め、履修者がいないと頭を抱える必要はなくなった。

だからといって、もちろん悩みがなくなっただけではない。最初の頃は、限られた日本語しかできなかつたため、言いたいことが言えずにひとしきり悩んだ。学生もどうしてよいかわからず困っていた。そこで考えついたのが、何度

も繰り返しゆっくりと、模範動作を見せることだった。学生が一連の動作について、はつきりとしたイメージを持てるようにするためだ。効果は抜群だった。日本人が、

中国武術独特の動きやリズムをマスターするのはとても難しい。体験するのはもちろんのこと、普段目にすることさえほとんどないのだから当然だ。そこで、私は動作の由来と意味を説明し、動きの過程でそれをイメージすることを教えた。太極拳の「白鶴亮翅」を行なう時には、鶴のように翼を広げて舞い上がることを想像しなさい、長拳の「弓步架冲拳」では、相手の拳を遮った拍子に反撃するという武術本来の意味を念頭に置くように、といった具合だ。すると学生達は、動作を正確に理解し、同時に徐々に興味も増していったようだ。こうして、最初は誰にも知られず、誰にも選ばれなかった中国武術は、すこぶる評判のよい

科目となり、今ではこの授業を受けたいが為に、わざわざ東京から学生が受験に来るまでになった。

私が行なった調査では、多くの学生が次のように答えている。中国武術を練習して中国文化の息吹を感じる事ができた。熱心で温かい指導のおかげで、中国人の善良さを知ることができた。だが、私はやはり最終的には、中国武術の持つ魅力が人を引きつけたのだと思っている。今でも覚えていますが、高校時代から中国武術を学び始めた学生がいた。彼は愛知大学に入学するため、懸命に努力して合格した。そしてその後中国武術研究会の会長になった。

愛知大学で教えるうちに、中国武術を選ぶ学生には、運動不足の者や、運動嫌いの者が多いことに気付いた。そこで、「なぜ中国武術を選択したのか」についてアンケートを行なったところ、以下のような回答を得ることができた。

1、太極拳は基礎体力(運動神経など)があまりなくてもよさそうなので、安心してできる。

2、誰も中国武術をやったことがないだろうから、皆が同じスタートラインに立って始められる。

3、競争がなく、チームワークも必要ないので、完全に自分のペースでできる。

4、珍しい。普通では体験できない。

これらをもとに、私は授業内容の大幅な見直しをした。何よりもまず学生達が基礎をマスターしやすいようにし、興味を深めていくという具合にだ。具体的にはまず準備体操で行なう柔軟体操に重点を置いた。健康面から言えば、柔軟体操は体の疲れをとりのぞき、血液の循環をよくし、運動効果を高めることができる。それが中国武術をマスターするための体

づくりの基礎にもなるからだ。中国武術のもろもろの動きは、高い柔軟性を必要としている。多くの学生は、「中国武術を始めてから、体が前よりも柔らかくなった。集中力もアップした。精神面も前より落ち着いてきた。中国武術は難しいけれど、やればやるほどおもしろくなる」と話している。

またもっと大切なことは、中国に対して関心のなかつた者たちが、武術を通して興味を抱くようになり、研究さえも始めたことだ。「中国武術には、伝統文化の名に恥じない深い哲理がある。武術を習い始めてから中国にあこがれるようになった。将来は中国に留学し、より深く中国を理解したい。それと同時に、もっと日本を大切にしたい」と言う学生もいた。

もちろん、誰もがこのように思っているわけではない。十一年日本で生活し、仕事や友人たちとの交流を通して感じたのは、日本

人は確かにまじめで勤勉な民族だけれど、少し理解できないところがある、ということだ。

例えば大学の講義で、学生がまじめに授業を聞くのは、ごく当たり前のことであるし、これは知識を吸収しようとする学習態度の現れでもある。しかし日本では実におかしな現象が見られる。まじめに出席し、がんばる者がしばしば歓迎されない。それどころか笑われることさえある。ついには皆から浮いてしまい、それ以上自信を持って練習することができなくなってしまう。あるいはまじめに練習はするが、目立つのをいやがり、わざと自分の力を隠して周りに同調するような者もいる。逆に、意欲のない者は、自分が悪いなどとはこれっぽっちも思っておらず、いい加減な態度が周りの学生に影響していることにも気付かない。それどころか涼しい顔をして自分はかっこいいとさえ思ってい

るのだから、本当に呆れるばかりだ。

こういう目に余る態度をいちいちあげつらう必要はないが、ただ私は学生達に「目立つ」という言葉の意味を正しく理解してほしいと思う。まじめに努力する人間は認められるはずだ。認められ、他の模範となるべきで、本来の自分を隠す必要は全くないのだ。「まじめさ」は決して悪いことではない。やる気のない者こそ深く反省すべきだ。不真面目な態度を許してはならない。もちろん真理を守り、自分の道を歩み、周りに流されず、それでいて皆とうまくやっていくのはやさしいことではない。時には勇気のいることだ。しかし信念を持っていけば、いつかは正しさが認められ、学習に適した良い雰囲気も生まれてくると信じている。

おわりに

二十一世紀は世界の文化が融合する時代となるだろう。中国武術がオリンピックの正式種目となれば、ますます普及していくだろう。

中国と日本は、中国武術が盛んな国であり、世界でもかなり影響力を持つている。日中両国は、中国武術をさらに広めていくことができるだろう。愛知大学の豊富な中国研究をもとに、今後も中国武術は、もつと深く、広く研究され、重視されるようになるだろう。日本では、文化的な面から中国武術を研究する人はまだ少ない。一部の太極拳の流派を除けば、長拳や南拳、武器法等の種目に習熟した指導者も少ない。だからこそ私は勤勉な牛となって、ひたすらこつこつと休むことなく日本の土地を耕していきたい。そして人々の健康と幸福のために、日中友好のために、このわずかばかりの力の全

てを尽くそうと思う。

(愛知大学非常勤講師)
(邦訳 近藤あい)

